

1980年代末に「ハルキ」「バナナ」が同時代作家として欧米で華々しく人気を集めて以来、海外の日本人作家を見る目は急激に変わったと言われる。次々と現代作家が紹介されるのとともに、今年に入って、日本の出版社の米国進出も相次いでいる。輸入超過といわれる中、日本文学の欧米への「輸出」状況を探った。

【木村知勇】

世界最大規模を誇る「フランクフルト国際ブックフェア」が、今年も8日から始まる。日本著作権輸出センター代表の栗田明子さんは、期間中、海外出版社との交渉に追われる。栗田さんはタイム社などを経て20年以上、日本の作品を翻訳出版する際の著作権代理業に携わってきた。よしもとばなさんが注目されるきっかけとなった、イタリア語版『キッチン』も仲介。

開業当初は「年に数点成約すればよい方」だったが、現在は年間100点前後の実績を上げている。その栗田さんが「旬の作家」というのが小川洋子さん。フランスではすでに十数点が出版されており、

日本で出たばかりの『博士の愛した数式』も、『新潮』に掲載された段階でオファーがきた。小川さんの『ホテル・アイリス』凍りついた香り『葉指の標本』はフランスでの映画化が決定している。

同センターではまた、吉村昭さんや奥泉光さん、柳美里さんらの作品も手がけた。吉村さんの『仮釈放』は米誌の書評で激賞された。奥泉さん

の『石の来歴』は仏、独でスタートし、米で出版されると二十世紀の優秀図書としてニューヨーク・タイムズで紹介されたという。「日本人が思

っている以上に、日本の現代作家は欧米に受け入れられる」と栗田さんは指摘する。一方、『羊をめぐる冒険』で村上春樹さんを米国に送り出した講談社インターナショナルでは、別の手応えを感じている。同社編集部

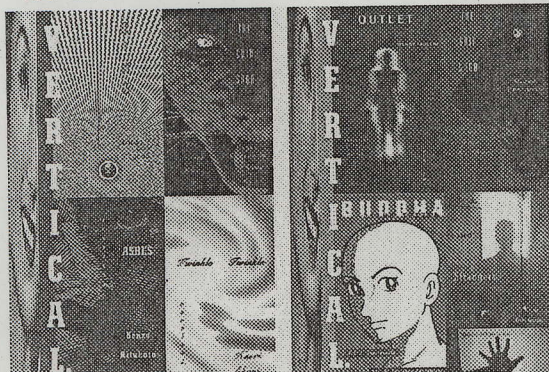
の久保田雄城さんは「ここ数年、エンターテインメント系が受け入れられつつある」と話す。同社が今年、米国で出版した桐野夏生さんの『OUT』は、米紙の書評で「フジヤマ、ゲイシャ、シンカンセンの時代の哀しみ」、栗本薫さんの『グインサーガ』、鈴木光司さんの『リング』、江國香織さんの『きらきらひかる』の4タイトルを刊行した。年内10タイトル、来年20タイトルを予定している。

「ハルキ」「バナナ」からミステリーへ

広がる日本文学の輸出



3月にニューヨークで開かれたアジア研究会でJLPPはブースを設けて、日本文化をPR。中央は協力する日本著作権輸出センターの栗田明子さん



パーティカルが今年刊行した英語版小説のリーフレット

文化庁が昨年スタートさせた「現代日本文学の翻訳・普及事業(JLPP)」。

文化庁も本腰

今年、委員会は「現代日本文学の翻訳・普及事業(JLPP)」の選定委員となら、芥川龍之介から山田詠美まで多様な27作品を初年度の翻訳作品に選び、すでに夢野久作の『ドグラ・マグラ』が仏で出版されている。JLPPの広瀬恵子理事に聞いた。

「5年ほど前に、米国の日本研究者から『翻訳センターが必要だ』と言われたのが事業のきっかけです。『日本という特殊な文化』を紹介するのはなく、作品を読んで作者を調べたら日本人だった、という土壌を作りたい。2年目は、米仏独露に委員会を設け、現地でも翻訳したい本を推薦してもらい、文化庁で選定する」